学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１０年１月９日
文責：ＪＵＮ

授業づくりに魅せられて

あけましておめでとうございます。

新しい年をどのような気持ちで迎えられたでしょうか。経済状態や社会風潮の影響から様々な困難が学校教育にも及んできていますが、どのような時代になったとしても、子どもたちの成長にかかわる教師としての責任は全うしなければという思いを新たにされているのではないでしょうか。子どもが好きで教師になったわたしたちだからこそのアイデンティティです。

すでに退職して７年目を迎えるわたしも、そんな教師の一人でした。思い返せば、子どもの瞳が輝く瞬間、何かを発見する喜びの表情見たさに、授業づくりに魅せられて歩んだ年月でした。

１　授業づくりの魅力とは？

教師として仕事をしていたときはもちろん、退職した今となっても外部協力者として授業づくりにかかわることがやめられないのはどうしてなのでしょうか。一言で言えば、授業づくりの魅力がわたしをとらえて離さないからです。

その授業づくりの魅力とは一体どういうものなのでしょうか。

冒頭で「子どもの瞳が輝く瞬間、何かを発見する喜びの表情見たさ」と述べたことが物語っているように、そこには子どもの存在が大きくかかわっています。多くの可能性を秘め、知る喜び、できるうれしさ、成長する感動をわたしたちにつまびらかにしてくれる子どもたちに接し、その子どもたちの喜び・感動をつくり出すために自らの知恵を総動員する教師の仕事に魅力があります。しかも、そのかかわりは子どもによって、学級によって、一つとして同じものがないのですから、どれだけ年数がたっても新鮮さが失われません。そのような時間を自分の仕事として持てるということは、人としてなんとも幸せなことです。

とは言っても、いつもいつも幸せ感を味わえるわけではありません。いえ、むしろ、子どもの喜び、感動を生み出すかかわりができなくて迷い悩むことのほうが圧倒的に多いというのが本当のところでしょう。それでも、授業づくりは魅力的なのです。迷いや悩みも含めて魅力的なのです。

授業という教師の仕事はかなりの困難を伴うものです。膨大な文化や学問をもとに子どもが学ぶ教材として組み立て、様々な個性・能力・人格を有する何人もの子どもを対象に一人ひとりの違いに応じてはたらきかけ、日によって時間によって様相を変え絡み

合う教材と子どもの実像をその場その場で瞬時に察知し判断して子どもの学びを生み出す、当然のことですがそこにマニュアルはなく、それは複雑極まりない仕事となるからです。

そうであっても魅力的なのです。一筋縄ではいかない奥の深いものであり、豊かな授業の実現には多くの困難を伴うものであっても、その魅力は決してなくなりません。それは、何度も言いますが、子どもの輝く表情があるからです。たとえそれが、何時間かに一回あるかないかの希少なものであっても、それを一度味わった教師は、忘れることはありません。それどころか、その希少な瞬間を追い求め続けるのです。

２．若い教師の挑戦

東海国語教育を学ぶ会の例会に何カ月置きかで継続して報告をする若い教師がいます。わたしは、安易に褒めることはしませんが、その熱意がうれしくてなりません。こういう人のためならどんなことでもしたいと思います。

若いということは、経験が少ないということです。教師の専門性は経験によって培われますから、そんなに早く実践に深みが出せないのです。

この教師の場合も、子どもの発言量は多いけれど、学び合うつながりが生まれないとか、よい雰囲気にはなっているのだけれど学びとして深まらないなどの課題に直面しました。それは、若いときにありがちな、憧れる授業のかたちを模倣してしまうこと、テキストの奥深さに対する理解が不十分なことから来るものでした。

そういう実践に対して、わたしは、具体的に指摘します。けれども、その教師の実践のやり方はこれでよいのだとも思っています。かたちの模倣もよし、テキストの研究不足もよし、それを例会に出して学ぼうとすることできっとその課題を克服するに違いないと思うからです。

その教師は、今回の授業は前よりよかったのではないか、評価してもらえるのではないかという期待を抱いて報告しているのだろうと思います。そして、そのたびに、自分では気づかなかった指摘を受け、授業の深さを感じ、道の遠さを実感しているような気がします。そう推測するのは、わたし自身がそうだったからです。斎藤喜博先生や氷上正先生に記録を見てもらうとき、まさにそういう心境になっていました。斎藤先生から事細かくわたしの足りないところを指摘されたことは一度や二度ではありません。それでも、圧倒的な問題点のなかに含まれる、たとえば「素直な授業だ」という一言で有頂天になったりしたものです。

そう考えて、ふと振り返ってみます。わたしは、その教師に、かつてわたしが斎藤先生や氷上先生からかけていただいたようなことばをかけているだろうかと・・・。若い教師の成長には目覚ましいものがあります。その教師の授業も、最初の報告で見た２年前の授業とは大きく変わりました。授業づくりの方向に芯が出来たように思います。もともと彼の授業には、子どもへのかかわりのよさと実践への謙虚さと意欲があふれていたのですから、これからのこの教師に大きな可能性を感じます。

わたしは、ことば巧みに自らの実践を披歴する教師ではなく、具体的な課題に真摯に向き合おうとする教師を信頼します。自分の成長に謙虚に立ち向かわない限り本当には

自らを成長させられないからです。そして、そういう教師の授業に接すると、その教師の５年後、１０年後を想像します。そして、どんな教師に成長しているだろうかとわくわくします。その教師も、わたし同様、授業づくりに魅せられた教師だからです。

３．ベテラン教師の転換

毎年、ベテラン教師だからこそと感じさせられる授業にいくつか出あいます。それは、見事なパフォーマンスと指導力で圧倒的な教師の存在感を感じさせる「うまい」授業ではありません。むしろ、教師よりも子どもの存在感のある授業です。ここまで子どもの考えを先に立てて、それでいて授業の進行に従って学びが明確にできる、それを自らが旗を振って誘導することをせずに実現するのですから舌を巻くしかありません。まさに経験の力です。

ところが、そうした授業を行った教師のほとんどが「自分はずっと教え込む授業をしてきた」と告白しているのです。日本の教育が一斉指導中心の教師主導型によって明治以来行われてきたことを考えると、その学校教育で２０年以上も授業を行ってきたベテラン教師がそうだったことはうなずけます。けれども、現実にわたしが目にした授業はそういう授業ではなく、まさに子どもが考えをつなぐ「学び合う学び」だったのです。伝統的な教師主導の授業をしてきた教師が、いったいどのようにしてこのように濃密な「学び合う学び」を実現するに至ったのでしょうか。

何年か続けてかかわったある学校のベテラン教師が、最後に訪問した研究会を終えた後の校長室で、次のようなことを述懐してくれました。

「この歳になって、自分の授業が変わるとは思いませんでした」

その教師は、テキパキとした話し方で、とにかく子どもにとってわかりやすく指導する教師として定評がありました。その教師がある意味安定している自分の授業を変えるという挑戦を敢行したのです。その教師はそのわけを語りはしませんでした。けれども、その学校の何年にもわたる授業づくりが彼女にその挑戦を促したことに違いはありませんでした。教える授業から子どもが学び合う授業に、教えられる学びから自分たちで考え発見する学びにという授業づくりが。

もう一つ別の学校の教師は、わたしのかかわる学校や研究会の授業を見て、それまで抱き続けてきた授業の理想像が崩れたという意味の話をしてくれました。そして、定年まであと何年かということを考え、いま授業を変えないときっと後悔すると思ったというのです。

もっとも感動的だったのは、わたしが訪問した日の特設授業において、見事なまでの子どもが学び合う学びを実現して退職したベテラン教師のことです。この教師は、その授業までに相当悩み迷ったようです。わたしに直接質問をしたり、特設授業のテキストについてわたしの意見を求めたりもして来ました。そして、彼女は、最後の最後に、子ども自らがテキストを追求する授業を実現して教師生活にピリオドを打ったのです。後日、その教師の退職を知り、なんとも言えない感慨に浸りました。ご本人はそんなことは考えておられなかったでしょうが、後に続く教師たちに実践者としてのありようを示してくれたと思ったからです。そして、退職の間際にそこまでの挑戦をして教師生活を

終えようとした思いが、深く深くわたしの心を揺さぶりました。
　ベテラン教師が授業を転換すると、ものすごいことになるというのがわたしの実感です。若い教師の新鮮で若々しい挑戦もすばらしいのです。前述したように、その成長の速さはベテランの比ではありません。けれども、ベテラン教師が本気で取り組むと、それは若い教師の足元にも及ばない事実が生まれるのです。それはなぜでしょうか。
　ベテランは、それがたとえ「教え込む授業」であったとしても、長年にわたって行ってきた経験があります。このテキストはどこが重要か、そのテキストをどう持ち込めば子どもが意欲的になるか、どう発問すれば子どものイメージが広がるか、そういった研究を何年も何年も実施してきた経験です。そこでは、雄弁に、丁寧に、様々な教具を駆使して、子どもにとってわかりやすい授業を心がけてきたのでしょう。
　それを、子どもの考えを待ち、子どもの考えを受け止め、出された考えと考えをつなぎ学びあわせる、「学び合う学び」に転換したのです。すると、そのベテラン教師には、いろいろなことが見えていて、それを内に持って子どもの学び合いを促すという対応になります。この「いろいろなことが見えている」ということが重要なのです。見えているということは、子どもの学び合いのどこがどうなっているかが判断できるということです。その判断ができるから、学びの質が高まるのです。
　授業のあり方を転換したベテラン教師のほとんどは、若い教師のような気負いを表しません。それよりも、どこか漂然とした自然さを感じさせます。授業づくりに魅せられ続けた風格のようなものが漂っています。若い人のエネルギッシュな立ち向かい方もよし、ベテランの枯れた挑戦もよしといったところでしょうか。

４．授業づくりは持続させてこそ

　学校教育は、いよいよ難しい段階に入ってきたようです。そして、いま、教師の質が問われています。免許更新制の検討がなされたかと思えば、大学院の２年間を教員養成期間に加えることやいわゆる仮免許期間を１年にするなどといった制度が検討されています。
　それはそれで重要なことに違いありません。けれども、授業をする教師の質は子どもにかかわる経験で最も深く養うことができるということを肝に銘じる必要があります。講演をどれだけ聞いても、講習会をどれだけ受けても、どれだけ本を読んでも、それで授業の質が高まるというものではありません。それは、生きた子どもを対象として、瞬間瞬間に生まれる事実に対応して学びを生み出すというはたらきに職人的な要素があるからです。これは、経験しない限り身につかないのです。
　経験は、ある期間行えばよいというものではありません。積めば積むほど深まるものです。そういう意味で、教師は教師である限り経験を積んで自らの成長を求め続ける存在だと言えます。その長い年月の挑戦を可能にするのが、「魅せられる」という感覚です。どれだけ実現が難しくても、どれだけ時間がかかっても、魅せられた者はその挑戦を止めることをしません。
　新しい年の始まりを授業づくりに魅せられてスタートさせようではありませんか。